

天皇と
マッカーサーの
どちらが
偉い？

日本が自由であったころの回想

室 謙二

岩波書店

大 皇 と
マッカーサーの
と ち ら が

偉い？
常州大学図書館
藏 書 章

日本が自由であったころの回想

室 謙二

室 謙二

1946年東京生まれ。大学在籍中からベ平連(「ベトナムに平和を! 市民連合」)に参加し、米軍脱走兵援助活動に関わる。フリーランスの書き手として硬軟さまざまなメディアに寄稿。雑誌『思想の科学』編集代表などを務めたあと、80年代後半からアメリカに住む。98年に市民権を取得。旅行記や政治論、文学批評、伝記等のほか、ファッション、音楽、コンピューター論、出版論、テクニカル・ライティングなどにいたるまで幅広いテーマを論じる。

著書に、『旅行のしかた』『アジア人の自画像』『踊る地平線』『帰らない旅』『日米生活対話』(ナンシー夫人との共著)、『コンピューター文化の使い方』(津野海太郎氏との共著)など。

天皇とマッカーサーのどちらが偉い？

—日本が自由であったころの回想

2011年5月26日 第1刷発行

著 者 むろ けんじ
室 謙二

発行者 山口昭男

発行所 株式会社 岩波書店
〒101-8002 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5
電話案内 03-5210-4000
<http://www.iwanami.co.jp/>

印刷・精興社 製本・中永製本

© Kenji Muro
ISBN 978-4-00-024032-1 Printed in Japan

目次

はじめに

1

1

おまえもアメリカ人になれ！——移民と理念の国アメリカ

ジェラルド・ハリス 7

移民の国アメリカ、理念の国アメリカ 10

ヨネムラさん 19

百の質問 21

口頭試問 23

2

ビーバップを歌いながら——ガレスピーと野球

ジャズ・キッドと神棚 27

シゲルの疎開 30

灯火管制 34

ジャズと野球の民主主義 36

アメリカでジャズを聞く 42

3 神田ではじまり神田で終わる——タトル商会の人びと

缶詰と古本 45

タトル商会 49

三島由紀夫 52

四十年後 56

4 天皇とマッカーサーのどちらが偉い?——アメリカ軍の時代

大きい人と小さい人 61

NOを言ふ声 65

食べ物の記憶・恋愛の記憶 69

短身のアメリカ兵 75

ゲラルヘア 79

ニプロさん、フォークダンスをありがとう 87

5 レッド・ダイパー・ベイビーとして——Rigidな考え方

ローゼンバーグ事件の息子 95

誇りについて 99

レッド・ダイパー・ベイビーってなに? 101

Rigidな思想 104

6 こいつは江戸川アパート?——中庭の民主主義

接収をまぬがれる 113

社交室の文化活動 116

士行さんの劇場 119

社交ダンス 123

タタミのタンゴ 127

劣ることなし 130

7 Yankee Go Home!——憲法第九条と否認

幸福の記号 135

大統領の愛した映画 142

平和憲法の観客 146

S N C C・学生非暴力行動調整委員会 151

暴力に対する非暴力 159

憲法第九条を作る 165

8 なんと言うのだったつけ、あの作業服?——ジーンズのグローバリズム

ジーンズの帝国 175

アメリカのアイコン、セックスのアイコン 177

9

Ma's Making Bombers

184

ヒップからデザイナー・ジーンズへ、そして世界服へ

188

同世代の脱走——ヨコハマ港から世界に向かって

秘密組織のアジトだって、本当かしら？

193

反軍活動に関する上院公聴会

197

KGBによれば

205

デュープ・スロートという男

221

アメリカン・デモクラシー

227

ヨコハマ港から世界に向かって

231

あとがき

241

はじめに

北カリフォルニアに行く途中で、数日間ハワイのホノルルに滞在した。それが私のはじめての外国（アメリカ）だったが、ホノルルの表通りにあるハンバーガー店のカウンターでハンバーガーを注文したら、オレンジ・ジュースが出てきた。Hamburger と Orange Juice ではまったく発音が違うのだけどなあ、これはいったいどういうことだろうと気後れしてしまった。スーパーに行つて食料品を買つてホテルに戻つて食べた。これだと英語を使わなくても食事ができる。バス乗り場がどこかを聞いても、店で品物について聞いて聞いても、郵便局で切手を買うのでさえ、一回では決して通じない。自信がなくなるから声が小さくなり、いよいよ英語は通じない、というのが最初のアメリカだった。一九七二年（昭和四十七年）のことだった。

ホノルルの裏通りを歩いていたら、黒人の警官と日系の警官が笑いながらコーヒーを飲み、いなり寿司をほおばっていた。いまから考えればごく当たり前の光景だが、ハワイの明るい光線の中での、警官の人種的組み合わせと英語の冗談（内容はわからなかったが彼らは笑っていた）、そしてコーヒーを飲みながらのいなり寿司という取り合わせには驚かされた。

私たちだってハシを使ってピフテキを食べるし、抹茶アイスクリームというのものもある。ライスバー

ガー(「きんぴらゴボウのライスバーガー」というものまであって、これは凄い)もあれば、それに日本の大発明のアンパンもあるし、和食に冷えた白ワインもいい。食べ物の和洋折衷と混合など当たり前なのに、それが外国で行なわれるとショックを受けるのだから偏見もはなはだしい。試してみるとわかるけど、甘いなり寿司にブラック・コーヒーは悪くない。だいたいアメリカは文化と人種混合の国であり、ハワイはその最先端なのだが、日本のアタマのままでハワイについてので、人種と文化の混合から生まれるポジティブなエネルギーなんてわかるはずがなかった。

つまり私は、英語はできないし、無知と偏見でつまった頭をのつけて、一九七二年にはじめての外国での数日を過ごしたのである。アメリカのことは子供のときから知っていた。英語はいくらへたでも中学校から勉強しているから少しは通じるだろう、というのはふたつとも間違っていた。というわけでこのときから、すべてやりなおさないといけなかった。

北カリフォルニアで友人の家を泊まりながら、友人の友人の家に泊まったり、友人の友人の友人の家を訪ねたりしていたが、本棚に十八世紀イギリスの歴史家ギボンの『ローマ帝国衰亡史』十二巻があるのをよく見かけた。私の居候先の友人(ダグラス・ラミス)は政治学の博士論文を書いていたので、その友人たちも博士課程であつたり、すでに大学で政治学を教えている人が多かった。なぜみんな『ローマ帝国衰亡史』十二冊を読んでいるの、と聞くと、どのようにアメリカ帝国が衰亡して死に至るか知ろうとしているのだ、とのことであつた。

アメリカに来る前に日本でベトナム戦争反対のデモに参加していると、そのときのシユプレヒコー
ルは「アメリカ帝国主義粉砕」と叫ぶのであった。「アメリカー、ティコクシユギヤー、フンサイー、
スルゾー」である。

アメリカは、帝国の外からは学生たちに囲まれて「粉砕するぞ」と言われ、帝国の中ではインテリ
たちが書齋でどのようにして滅亡するのかを研究していた。日本の学生たちもアメリカの研究者もい
ずれも左翼であったが、この向かい合ったふたつのことの組み合わせは、想像もしないことだった。

深刻な経済危機が始まった二〇〇八年(平成二十年)の冬(最初のアメリカ旅行からそのときまで三十
六年たっていた)、アメリカに住んでいる私が日本への旅行から帰ってきたとき、サンフランシスコ
空港で二週間ぶりに会った妻は、ごくカジュアルに「これまでアメリカは没落すると言われたり、私
たちもそう言ったりしてきたけど、ついにそのプロセスの現場を生きているようね」と言い、私もそ
の意見に賛成した。

もつとも同じ日本旅行で、日本人の友人たちに「アメリカがダメ(没落)だから、そのために日本も
ひどい目(被害)にあっているのよ、アメリカがしつかりしなきゃ」と何回も言われた。もはや「アメ
リカ帝国主義をフンサイするぞ」派は日本にはいなくて、「アメリカ帝国ががんばらないと日本もつ
ぶれて損をする」派ばかりのようだった。三十六年の間に、アメリカも変わったし日本も変わった。
わつしよいワツシヨイと祭りの神輿みこしのかけ声で、道路を練り歩くベトナム反戦・アメリカ帝国主義粉

碎デモも遠い彼方になった。

いま書き始めたこの本には、その三十六年間にアメリカについて学んだことをもとに、一九四五年（昭和二十年）から一九七二年（昭和四十七年）までの、私の経験を通して見た日本とアメリカの体験が描かれる。それは私の個人的体験であると同時に、日本自身の体験でもあり、またアメリカ自身の体験でもある。その二つがぶつかり合流する物語である。

二十年ぐらい前に、鶴見俊輔さんに「ムロさん、『アメリカへ！』という本を書きませんか」と言われたことがある。さまざまな人がどうやってアメリカにやってきたのか、どんな期待と希望と絶望をもってアメリカにやって来たのかを書けば、その総体がアメリカです。アメリカに来るまでのことが、アメリカに投げかけた夢がアメリカです。と、目を大きくして断定的に言った。俊輔さんはあのとときスタッズ・ターケルの仕事を頭においていたのかもしれない（注1）。

残念なことに、私はその本を書かなかった。とうてい私が一冊で書けるテーマではない。もし実現すれば、それは一冊の本ではなくて、世界各国の書き手が参加する多言語の「アメリカへ！」双書というものになるだろう。遅ればせながらも私が書くこうとしているこの本は、その「アメリカへ！」双書の一冊かもしれない。だからこれは、一種の移民文学である。これはいまや私の国になった、そして私の家族の国にもなったアメリカと私との物語である。

注1 Studs Terkel(1912-2008) シカゴのラジオのパーソナリティをしながらインタビュー技術を確立して、それを使って本を書いた。おなじシカゴからできた大統領候補オバマに、「ルーズベルト大統領のニューディール政策を引き継げ」という助言を残して、オバマが大統領に決まる直前に亡くなった(『仕事!』、『よい戦争!』、『アメリカの分裂』 中山容他訳、『人種問題』 田村博一他訳、いずれも晶文社、など)。

1 おまえもアメリカ人になれ！——移民と理念の国アメリカ

ジェラルド・ハリス

あのときジェラルド・ハリスはまだ二十歳代の終わりだった。この長身細身の白人が、長唄の三味線をかかえて羽田空港から（成田空港ではありませんよ）アメリカに発ったのは一九七二年（昭和四十七年）八月で、ゲートに入っていく別れぎわに、彼は私の方を振り返って、「ムロ、おまえもアメリカ人になれ！」と唐突に金沢弁の大きな声で言った。

だけど「アメリカ人になれ！」というのは、いったいどういう意味なのか。私は日本人であって、それが急に空港での別れぎわに、「おまえもアメリカ人になれ」と言われても、どうして私がアメリカ人になる必要があるのか。たとえなりたいたとしても、どうやったらアメリカ人になれるのかわからない。第一そんなものは「なったり」、「ならなかつたり」するものなのだろうか。だいたい、彼の言う「アメリカ人」という定義がわからなかつた。アメリカ人が、アメリカ国籍を有する人の意味なら、私はそれになれる可能性があつたが、アメリカ人種を意味したら（もつともアメリカ人種というのは

存在しないが、そんなものになれるはずがなかった。

私はまだ二十歳代の中ごろで、それまで日本から一度も外国に出たことがなく、はじめてのアメリカ長期滞在に発つ数ヶ月前のことだった。ジェラルド・ハリスは十年近く金沢に住んだあと、いまから考えるとおよそ彼らしくない考えだが、奨学金をもらってシカゴ大学で日本文化を研究するためのアメリカ帰国であった。長い間、自国アメリカ以外の国に住んでいて、アメリカに帰ることに少し動揺していたのかもしれない。その間にアメリカは一九六〇年代後半のカウンター・カルチャーを通過していたし、ハリスさんはそのアメリカ文化の変動期の外にいたわけで、知らない国に帰るような不安があったのだろう。そして離れていく日本と「未知のアメリカ」をつなぐブリッジをつくりだしたくて、おまえもアメリカにこい、アメリカ人になれ、と言ったのかもしれない。

「おまえもアメリカ人になれ」という日本語を聞いたのは、そのときが初めてで、それ以後も、誰からも聞いたことはないが、この言葉にショックを受けたのだと思う。だからこの会話が長い間わたしの記憶のどこかに残っていた。

戦前の大日本帝国時代であったなら、アジアに住む人に日本語で「おまえも日本人になれ、天皇の臣民になれ」と高圧的に言ったことがあったかもしれない。それは強制的な権力の言葉であつたらう。しかしジェラルド・ハリスの「アメリカ人になれ」という言葉は、そのようなものではなく、友人への呼びかけであつた。

アメリカが移民の国であることはもちろん知っていた。だから最初に来た移民が、ほかの人にアメリカにこないかと呼びかけるのは、あたりまえのことかもしれないが、この言葉が、「ムロよ、おまえも移民になれ」という意味だとわかったのは、ずっとあとのことであつた。第一わたしは、アメリカについて知っていると思っていたにもかかわらず、アメリカについて何も知らなかつた。

もつともジェラルド・ハリス以外のアメリカ人が、あのときあの場所で、オマエのことは気に入つた、おまえもアメリカにこい、アメリカ人になれ、と日本語で言えたかどうか。彼はそのときアメリカに戻つて大学院で日本文化を研究するはずであつたが、大学での研究活動に合つた人間ではなく（だからすぐに大学院をやめた）、田舎ものであり、率直で、インテリのためらいがない。だからこそあのときに、彼の口から「アメリカ人になれ」という言葉が出てきた。ハリスさん、もしこれを読んでも、私が悪口を書いているのではないことはわかるでしょ？

あのとき、アメリカの評判はベトナム戦争のおかげで、はなはだ悪かつた。日本にいる知的なアメリカ人なら、進歩的なアメリカ人なら、知的でも進歩的でもないアメリカ人でも、自国をネガティブに言うことはあつても、肯定的に、アメリカはいい国だと言うことには躊躇したのだ。なにしろベトナム戦争でアメリカの評判は悪かつたから。

しかしながらジェラルド・ハリスは、「ムロ、おまえもアメリカ人になれ」と、てらいもなく言つた。彼はベトナム戦争はけしからん、と思つていたが、自国アメリカはいい国だと思つていたし、移